

行脚修行を通して伝わる

「神仏の慈悲」

前号までのあらすじ…『伊勢神宮』の、外宮(げぐう)から内宮(ないぐう)へと歩を進めた私の目の前に、お題目(南無妙法蓮華經)を唱え、『日蓮宗』を名乗る、二七坊主が現れた。私の心中に、怒りがこみ上げてきた…。

私は彼に、「リュウショウウさん… あんたの話では日蓮宗の僧侶らしいが、身延山で修行の後、日蓮宗僧侶を任命された、“日蓮宗”の私から見ると、どこをどう見ても、あなたは日蓮宗の僧侶には見えません。あなたがどういふ訳で日蓮宗を名乗り、この街頭で『南無妙法蓮華經』と唱えているのかは知らない。しかし、ロクに日蓮聖人や、南無妙法蓮華經のこと、ましてや他の宗派(仏教)との違いも知らないで、説法まがいの事をされたんじゃないか、こちらも黙って見過ごすわけにはいかないよ」と、彼に詰め寄ると、「何を勝

手なことをぬかしやがって…宗教も沢山に派閥が分かれていて、宗教も企業と同じで、何も変わらねえじゃねえかよ…」と。そして続けざまに「元々はロシア人の男が“南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經…”と唱えていたんだ。そこへ小銭を入れていく、参拝者の姿を見て、俺もここでやろうと決めて、それからやっているんだ。何も悪い事をしていないんじゃないし、人のやっていることに口出すなよ！」そう投げ捨てる様に言うと、分が悪いと感じたのか、荷物をまとめて帰り支度をしはじめた。

私は驚きを隠せなかった。見知らぬ外国人も、我が日本で宗教を食い物にしているのか…そう思うと、本当に情けなくて情けなくて…。怒りが悲しみに変わっていくのが分かった。

そんな屈辱的な事を聞いて「はい、そうですね」なんて通り過ぎるわけもなく、ましてや日蓮聖人をはじめ、我々僧侶を侮辱(ぶじよく)する様な事をしておいて、それを黙って見逃すわけにはいかない。私は、意を決して彼に「あなた、自分が生きる為なら、何をやっても良いと思いますか!? そんな事ないでしょう? でも今あなたがやっている事は、人を騙して、自分に嘘をつ

いて、今現在のことしか考えてないじゃないか?! そんな事をして今日を生きても、ただ虚しさが残るだけです」と、私は精一杯の慈悲心で、諭(さと)す様に語りかけた。しかし、私の気持ちに彼の心には届かなかった…。彼の表情が、瞬間湯沸かし器の様にパツと険しくなると、「おまえに俺の気持ちに分かってたまるか!」と口調を荒げ、怒鳴りつけてきた。「このやる…。日蓮宗の邪教が何を言っているかあー! 何を根拠にそんなこと言ってるやがんだ!。俺は伊勢神宮から許可をもらってここに立ってるんだ何が悪い! お前が何と言おうが、何も俺の耳に入っていないぞ。お前は邪魔だ。さっさとどこかに行けえー!」と。

彼は、どうしようもない自分の状況に暴れ出したのだ。そんな尋常じゃ無い彼の奇声に反応して、往来している参拝者達は、一斉に私達へ冷たい視線を突きつけてくるのが空気で分かった。周囲を見渡すと、参拝者は足を止めて我々の方を振り返り、軒並み立ち並ぶ老舗(しにせ)の店員さん達も表の通りに姿を現し出した。我々の問答を見聞き始めたのです…。しかしそんな状況に、ひるんでる場合じゃありません。ましては、ますます彼の良心に訴えか

ける様に:「伊勢神宮が何の許可を出すんですか? 口から出任せなのは分かりますよ。神聖な気持ちで参拝に来られている人達が、あなたに頭を下げて、その賽銭箱(さいせんばこ)にお金を入れていく…そんな姿を見ても、本当に何とも思わないの!」と語りかけた。

そんな私の声が虚しく響くかの如く、彼の奇声は止みません。彼の口をついて出てくる言葉は「日蓮宗のクソ坊主: 日蓮宗はダメな連中だ: 仏教なんてクソ喰らいだ:」等々と、憎まれ口は更にエスカレートして、とても形容し難い言葉を吐きつけてきました。

そんな我々のやり取りを見聞している周囲の人達がザワツきはじめた…。周囲の人達からすれば、僧衣を身にまとっている人間が2人、何やら言い争いをしているぞ。聞こえてくるのは「日蓮宗は最悪だ:」等々。「あの2人は日蓮宗の坊さんなのか? 日蓮宗って品がないね: 日蓮宗って何か嫌だよね:」と、悪いイメージを植え付けかねません。このままじゃ罪のない日蓮宗のイメージが、ただただ悪くなっていくばか

り。そんなバツの悪い状況はあり
ませんでしたよ（泣）。

彼とは正論で話しても埒が明か
ないと判断した私は、とにかくこの状
況から脱しなきゃという思いと、ど
うにかして彼に改心してほしいとい
う思いとで、退きたくはなかったが、
状況が状況だっただけにしょうがな
い。

最後は、奇声を発する彼に「とに
かく、こんな所に立つて、参拝者の
神聖な気持ちを踏みにじる様な真似
だけは、今日限り止めなさい！」と
彼の心根に届けとばかりに言い残
し、その場を後にした。

私は釈然としない心境で、『伊勢
警察署』（内宮から五^分ほど離れた
場所）に駆け込んだ。そしてお巡り
さんに私の気持ちも含め、一部始終
の話をし相談した。お巡りさん曰（い
わ）く、「サギまがいと言っても、そ
れを取り締まるのは難しい。商店街
の人達からのクレームも無いし、今
後は注意して巡回しますが、何か事
件でも起こさない限り、補導するこ
とは出来ません」との対応だった。

お巡りさんの立場も分かるが、こ
れでは二人目、三人目の二七坊主が

今後も出現する可能性がある…。でも
しょうがないのかなあ…黙って見過ご
すしかないのか「ハア…」。

そう諦めかけた時です。やはり神仏
は黙っておられませんでした。警察署
に1本の電話が鳴りました。「ハイ…分
かりました。それでは今から向かいま
す。」と言って受話器を置いたお巡り
さんは、「あなたの言っていた坊さん
が、店先で大声を出して、参拝者ら
が迷惑をしている」との通報でした」
と。その言葉を聞いた私は、
“神仏は何時も見ていて下さるんだ
な”

と少し安堵（あんど）した。私はお巡り
さんに「明朝、改めて顔を出すので、
宜しくお願いします」と伝え、走り行
くお巡りさんの後ろ姿に、心から手を
合わせ見送った。

そして明るる朝、私は約束通り警察
署に顔を出した。お巡りさんにお話を
伺うと、「彼が僧侶なのか、僧侶でな
いのかは別にして、去年の暮れから勝
手に、伊勢神宮に立っていたようだ。
商店街の方々からのクレームもあり、
厳重（げんじゆう）な注意をして彼を帰した」
とのこと。警察としては、それくらい
しか出来ない様子だった。

この1件を、読者の皆さんはどう思
いましたか？一般の人達が宗教を不信
に思うのもよく分かる様な気がしま
す。それは、こういう輩が世の中に少
なからず存在し、しかもそれがまかり
通ってしまっている現代社会なので
から…。

これはあくまで推測ですが、恐らく
彼はこの不況の只中で、職も無く、お
金が無くて生活も思う様にならず、苦
しんでいたのかも知れませんか。

私は日蓮宗の僧侶として、私なりに
真剣に考えている一僧侶として、こん
な人間が世の中に出現している現実を
知ったショックに、今後の宗教の行く
末、そして日本の行く末が案じられて
ならなかった。「内宮」と「外宮」を
参拝した後ただだけに、伊勢の神様
は、私に本当の現実を突きつけて下さ
ったのだと感謝した。そしてより一層、
行脚（ぎやく）へ向かう気持ちが真剣なものにな
ってきた。

私達は誰も、心に魔を具（まをぐ）え
ているものです。その魔が姿を現す時
というのは、自分に余裕が無くなった
時ではないでしょうか？そんな心に余
裕が無くなった時こそ、心の軸を正し
てくれるものが必要になります。それ

が宗教だと思えます。宗教をたとえ
るなら、南十字星のようなものです。
南十字星を見失わなければ、羅針盤（
しんぱん）が無くても船乗りは航路を
誤ることはありません。宗教とは、
自分自身を見失わない“心の羅針盤”
なのです。ひるがえって、この混乱
する現代社会に生きる私達だからこ
そ、法華経『南無妙法蓮華経』を、心
の常備薬に備える必要があるのでは
ないでしょうか。

三重県『伊勢神宮』を後に、次に
向かったのが奈良県『長谷寺』、そし
て吉野桜で有名な吉野山へと続いて
いく…。

次号へ続く…合掌

副住職 谷川 寛敬

